

「チーム〇〇・絆・団結」と「同調圧力」 取込主義と排除主義

●集団至上主義に潜む危険

「ワンチーム・チーム〇〇・絆・一致団結」等と叫ぶには注意が必要です。個々人には、その背景や事情があります。ワンチームを創ることが目的となってしまうと、一人一人が見えなくなってしまう。組織という箱の中で、異質を排除・差別する空気ができてしまうと、①自分の物差ししか持たない→②自分の物差しで相手を測る→③測った上で断罪する…こういった暴走も生まれかねないです。個人主義や非協力者のレッテルを貼られてしまうこともあります。

●「全員野球で行こう」は、「おじさんビジネス用語」

金澤美冬さん（おじさん専門ライフキャリアコンサルタント）によると、この言葉は 同一の職場文化にどっぷり浸かって同じような景色を見続けてきた方々が、お互いが絆を強くする合言葉のように使っているそうです。逆に言うと、通じないのは仲間じゃない、と言う事です。こういう言葉が、時に相手を傷つけたり不愉快にします。心無い「全員野球・チーム〇〇」が、逆にチームをバラバラにします。

●内面を見通すのが真の思いやり 行き過ぎた正義感・道徳感が相手を傷つける

集団社会には秩序やルールが存在し、自分勝手では生きづらくなることも確かです。ですから、付かず離れずお互いを尊重して、適度の距離を保つことがよいと考えます。相手の事情や領分、物差しを押し量ることこそ、見えない協力・思いやりです。個人の事情を考慮せずに土足でずかずか入って、「感謝」「思いやり」「協力」等々の言葉を並べて、団結を強調しないことです。

●個があって、全体がある

まずは自身の守備範囲や領分をきちんとこなすこと。それができての組織への寄与です。組織のために動きたくても、諸般・個々の事情や障害で動けないことだってあります。気持ちや志があっても動けない。外面で判断され、評価や批判される。…それが集団の面前なら、どれほど悔しいことか…

●強者は自分を絶対化したがる

強い立場にいる人（年配者や管理者、教育・スポーツ等指導者、健常者等）は、往々にして相手に「～すべき」等、正義の御旗を振りかざしがちです。説法する前にまずは相手の言い分（事情）を聞きましよう。理屈と感情は別物。正義はひとつとは限りません。他人を動かすのは、理屈ではなく気持ちです。相手に気分よく動いてもらうには、相手をよく知った上に、どのような言葉かけをすればよいかを考えるとよいと思います。

●一にも二にも相手理解に努める ～ 組織には隙間（余裕）が必要 ～

「みんななかよく」「一致団結」は理想ですが、現実はどうでしょうか。世界は平和でしょうか？ 集団は多種多様な人々の集まりです。理屈で言うほどに簡単ではないです。軽々に掲げるようなものはなさそうです。「みんななかよく」「一致団結」が過ぎると、苦しむ子どもやしんどくなる大人が出てきます。その人への無知や無理解、誤認が苦しみの根源です。そうなると、自分の気持ちや言い分を殺してストレスを溜めてしまうことが往々にあります。ますます、離れていきます。取込みどころか結果的排除に陥り悪循環です。

一致せずともほどほどに、「ゆるやかな連合体」で十分と思います。個人も組織も完全無欠ではないことを念頭に、相手理解に努めれば「一致団結」を口癖のように叫ばなくても、組織は自然とまとまっていくもの、成長していくものと考えます。お互い様です。